慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	戸田貞三著 社会調査 及びエルウッド著 社会学方法論 : 批判的研究
Sub Title	
Author	小島, 栄次
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1934
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.28, No.9 (1934. 9) ,p.1417(99)- 1431(113)
JaLC DOI	10.14991/001.19340901-0099
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19340901-0099

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

戸田貞三著「社會調査」及びエルウッド著「社會學方法論——批判的研究」

小島榮次

この二書を同時にこゝに紹介するのは、社會調査に關聯して筆者が讀んだもののうち比較的に新刊のものとして選んだだけで、他に特別の理由があるのではない。

戸田貞三著「社會調査」四六判四四三頁昭和八年十二月時潮社發行

これは筆者の知る限りに於いて、本邦に於ける斯かる種類の著書の最初のものである。著者は多年日本の家族に關する社會學的調査に從事し、且つ又東京帝大に社會調査の講義を擔當して、疑ひもなく社會調査の實際と理論の兩方面に通曉する本邦最高權威者の一人である。今この人に依つて斯方面最初の著作が發表されたことは、社會調査に關心を有するものの一人としてまことに喜びに堪えない。著者に從へば、此書に於ては現實生活を正確に捕へる爲には如何なる方法があり得るか、又それぞれの場合に應じて如何なる調査方法が最も有效であるか、尙又それぞれの調査方法はその適用範圍に如何なる限界を持つか、一定の調査方法によつて正確に捕へ得る事實は如何なるものであるか、その方法にて正確に捕へ難き事實を捕へる爲めには如何なる補助手段が用ゐらるべきであるか等を

述べることに力點を置いた」（序文二頁）のであつて、事實四四〇頁程のうち三五〇頁程が、諸種調査方法・調査の準備及び整理に就いての指針或は技巧・の說明に充てられて居る。他の約九〇頁のうち三〇頁程は、社會調査方法の分類を行ふ上に於ける、又問題の性質に從つて適當なる調査方法を選ぶ上に於ける、根據としての社會學的考察である。結局殘りの六〇頁程が、社會調査の本質に關する理論的考究・その發展の簡略なる歷史・及び社會學體系に於けるその地位の闡明に費されて居る。まことに右に引用した序文の一節が示す著者の實際的態度にふさわしい取扱ひ方である。次にその主要部分の概要を紹介しよう。

先づ社會調査とは何であるか。最初この名稱が用ひられ始めた時に社會調査と稱されたものは、社會事業又は社會政策に關心を持つ人々が、夫々の仕事をより有效に行ふが爲めに行つた調査であつた。その後「この（社會調査なる）言葉が次第に世に擴まるにつれて、社會事業家等がこれに賦與した意味よりはなほ一層廣い意味がこれに附け加へられるやうになつた。最近になつて社會調査は社會改良事業等に直接役立つといふだけよりは、更に科學的に行はれねばならぬと主張する人々が現はれた。これらの人々は、社會改良の爲めの資料獲得と云ふ功利的の要求を暫く第二のものとし、事實上人々の社會生活が如何に組み立てられて居るかを正確に尋ね出す方法があるとすれば、それが眞の社會調査であると唱へてゐる。それ故にこの言葉は二つの意味を持つてゐるといはなくてはならぬ。」（二—三頁）即ち社會調査は、當初社會改良の動機に出づるものが行はれ、後には科學的探究の動機に出づるものが行はれるやうになつたと同時に、調査の範圍も擴大されて來た。斯くして今は廣狹二義の社會調査を認めることが出來る。「廣義の社會調査は社會を形造つてゐる人々の生活條件の調査である。……人々の社會生活を三つの方面から調査せんとするものである。一つには吾々の社會生活上に何を寄與するかと云ふ點から人々の生活行動を觀察し、二つには社會生活から何を受け取るかといふ點から人々の生活を調査し、しかして第三には此の如き生活條件を守らざるをえないやうになつたのは如何なる事情に基くのであるか、その由來如何を考察せんとするものである。次に狹義の社會調査は前に述べた如く、歷史的には最初に社會調査として注意されたものであるが、それは享受生活上の保證の乏しいためにやゝもすれば一般の傾向から離れ、社會生活に何等かの不安を齎し易い人々の生活條件の調査である。この意味の社會調査は生活條件の調査といふもそれは主として享受生活の側だけについて人々の生活內容を觀んとするものである。」（三—四頁）結局、社會事業乃至社會政策關係の調査が狹義のものであり、それ以外のものも包含せしめて人間の社會生活の調査一般が廣義の社會調査である。而して後者の主要なる具體的形態としては、職業及び生計の調査を擧げることが出來る。

吾々は、コント以來の社會學發展のあとを回顧し、社會改良の觀念との關聯に於けるその傾向を辿つてみれば、社會學は最初社會改良の觀念から生じて來たが、後にサムナー・デュルケム・ジムメルその他に依つてこの觀念と絕緣され、實踐的色彩を失つたことを知る。今や社會學は「現實の社會生活とは緣のない『去勢された』學問として永久にその生命を失ふ」（五〇頁）危險がある。斯かることのないやう、換言すれば「社會學を吾々の社會生活にとつてもつと有用な潑溂たる學問にするには……人々の現實生活そのものを觀察の對象にする必要がある。」（四九—五〇頁）斯うした見地から社會學の復活をはかる運動が最近世界的に目立つやうになつた。例へばドイツの文化社會學・アメリカの都市社會學・フランスの新社會學主義はその傾向を代表するものである。「吾々の從事する社會調査も亦社會學に對しては右の如き意圖の下に發展の緖につかうとしてゐる。かくして社會學は再び人類社會の變遷過程において占める精神的、目的的要素の役割を認めて、人間の精神と集團の文化とに制約せられる人類の社會生活もし

くは社會行動を現實に即して觀察し、攻究しやうとする學問に還りつゝあるのである。」（五〇頁）而して斯かる種類の社會學は、テンニイスの社會學分類即ち社會學を分つて理論社會學・經驗社會學・應用社會學の三とする分類に從へば、正しく經驗社會學に該當する。即ち經驗社會學こそ社會調査を基礎として成立つものである。同時に又、社會調査は「經驗社會學と同樣にたゞ社會的事象のみを取扱ふ」云ひ換へれば「人類の集團生活における社會的方面をその他の方面から分離」（五五頁）して取扱ふものであつて、從つて經濟學的調査・政治學的調査等と區別されねばならない。

以上が第一章「社會調査の意義」及び第二章「社會學と社會調査」第一節「社會學體系における社會調査の地位」の主要部分の極めて簡單な要約であるが、この要約の最後の部分に當るところで著者が社會調査と呼んで居るのは社會學的調査のことである。社會調査一般（社會學的調査及び然らざるものを含めて）が、右に述べたやうな地位を社會學體系中に占める筈はない。著者も「吾々は社會學的な社會調査を他のすべての非社會學的な調査もしくは社會學的に見て素朴な調査から區別しうるのである」（五五頁）と云つて居る。然らば社會調査一般と社會學との關係は如何と云ふに、「ある事象を正確に調査する場合にはその事象が一般的社會生活構造もしくはその變遷過程の何れの部分に屬するかを豫め見當を付け、問題の性質に最も適當せる調査方法を採用しなければならぬ。そこで調査員たるものは凡そ人類の社會生活がいかなるものであるか、その構造は如何、その過程は如何等について豫め相當の知識を得ておく必要がある。社會學は人間生活のこのやうな方面を研究する學問である。」（四四頁）從つて社會調査には社會學の知識が必須である。斯くして著者は自身明言して居るわけではないが、社會調査一般を以つて、その方法の上に於いて社會學に基くものたるべきであり同時に又社會學體系中に前述の如き地位を占めるもたるべきであ

ると考へ乍らも、然し現實には然らざるものも亦一般に社會調査と稱されて居るのを容認する、と云ふ立場をとつて居ると忖度し得る。斯く考へて來ると、社會調査とは何ぞやの問に對する著者の回答も、一層明確になりはせぬかと思ふのである。本紹介の筆者は、社會調査を以つて社會科學及び社會技術に資料を貢献する目的で行はれる社會現象の調査と解し、その研究は一つの技術學であり、方法としては主として社會學に據るべきものであると考へて居るが、恐らく本書著者もこの點では同樣の意見を抱いて居るのであらうと思ふ。

次に第二章第二節「社會集團の構造」及び第三節「社會調査の分類」に於いて、社會集團の自然集團的方面と文化集團的方面とを分つて夫々に說明を與へる一方、調査方法を（A）全體調査又は統計的調査法（B）部分調査又は選擇調査法（C）個別調査又は事例研究法の三種に大別し、自然集團的方面の調査には客觀的調査法たるAが適當であり、文化集團的方面の調査には集約的或は主觀的調査方法たるB或はCが最も有效である所以を明かにする。

第三章以下の五章は、前記三種の調査方法・それに補助的手段としてのサーストン法及びアンケート法・社會調査一般に必要な準備階程及び調査結果の整理階程・に就いての懇切明解な說明である。殊にこれ等各章に於いては、例へば全體調査に對しては國勢調査・部分調査としては內閣統計局の家計調査・個別調査としては協調會の農村實地調査その他・を以つてした如く、一々實例に據つてその性質・手續等を詳細に說明して居るから、讀者の理解と印象とを深めて居ること多大であると同時に、本邦及び諸外國に於いて從來行はれた主要なる社會調査に就いても相當の知識を與へて居る。

これを要するに、本書は理論よりもむしろ實際に重きを置く態度にて著され、全體として均衡のとれた好著であつて、本邦に於ける社會調査の研究に多大の貢献をなし得るものであると云ふに躊躇しない。唯筆者としての欲を

云へば、殊に吾國に於いて從來未踏の方面に如何程の調査可能性が存在するかを出來るだけ具體的に示し、且又讀者のこの上の研究に對する手引として內外文獻及び主要なる社會調査の目錄を附したなら、この書の價値はいやが上にも大なるものとなつたであらう。社會調査に關するより、理論的な研究例へば社會調査の本質の一層明確な規定・社會學の方法としてのその意義に就いての一層の究明・調査方法の分類法それ自體に就いての論究・等は、この書の性質上、恐らくこれとは別の場所に於いて行はれることを信じ、大なる期待を以つて待ちまうける次第である。

Charles A. Ellwood, Methods in Sociology: A Critical Study. Durham, North Carolina: Duke University Press, 1933. pp. XXXIV+214.

この書は主として、近年米國社會學者の一部に擡頭して來た所謂「自然科學としての社會學」の主張に對する批判として著されたものである。本紹介の筆者は嘗て本誌上に社會調査の研究と關聯して、この傾向につき簡單に紹介したことがあるが（昭和八年八月號「社會調査に關する若干の基本的考察」第四節參照）一言にして云へばこの「自然科學としての社會學」といふのは、社會事象の研究に自然科學的方法が適用さるべきであるとする態度を以つて社會學を見るものである。單に自然科學的方法をも併用せよと云ふのではなく、社會學をも方法の點に於いては自然科學と同一視せよと主張するのである。斯かる主張は、社會生活の研究に極度まで主觀を排斥する態度であり、社會生活の眞の樣相をあるが儘に現さうとする欲求に基いて居ることは云ふまでもない。而して自然科學的方法即ち觀察・實驗・測定を用ふるのであるから、從つてこの立場の社會學研究に於いて社會調査は特に重大なる意義を持つに至る。故に社會調査を一個の技術として研究する者にとつては、斯かる主張から出發した社會調査の行はれることは、いづれにしても大なる利益を齎す可能性があらう。と云ふのは、この主張が承認されると否とに拘らず、これ等の人々が社會調査の技術の進歩に貢獻する所は大きいであらうと思はれるからである。斯くしてこの「自然科學としての社會學」の傾向を吟味することは、單に社會學の方法論としても重要な問題であることは勿論だが、社會調査の關聯に於いても、社會學體系に於ける社會調査の地位に關し、又社會調査の技術の進歩に關して、重要な意義を有すると云はねばならぬ。こゝに紹介するエルウッドの著書は、全卷の半を擧げて斯かる傾向に對する批判を試みて居る。勿論著者も、觀察・實驗・測定等の自然科學的方法を社會科學にも用ふることを希望する。社會科學に斯かる方法を用ひ得る場合があれば、それは吾々の知識を一層精密ならしめる點で有用であるから、必ずそれを用ふることが望ましいと本書の所々に繰返して居る。（例へば一五、八五、九九の諸頁）然し乍ら著者から見れば、斯かる場合は社會科學の對象の一部分に限られ、他の場合に於いてはこれ等の方法を用ふることが適切ではないのである。結局社會學を含む一切の社會科學は、自然科學と共通の方法をも用ひ得るけれど、その他に社會科學獨自の方法をも持たなければならない。從つて方法の上から「自然科學としての社會學」を考へることは誤謬であると結論する。次に著者の主張を要約して見る。

抑自然科學の研究に用ひられて居る主要な方法は觀察・實驗・測定である。從つて自然科學の對象は、觀察し得るもの・實驗し得るもの・測定し得るものである筈である。外的世界に生じて、吾々の感官を通じて知り得ることが出來、心的過程或は因素に訴へずして敍述し得るものである。社會科學の對象をもこれと同樣に看做し、前記の自然科學的方法を適用せんとする態度から生れたのが所謂「自然科學としての社會學」である。而して同時にそれは極端な客觀主義を生み、極端な行動主義に走らしめる。然し乍ら社會科學の對象は、自然科學の對象とその性質を大い

に異にして居る。社會科學の對象は政治にしろ經濟にしろ宗教にしろ教育にしろ文化にしろ、或は又社會の起源・構造・過程にしろ、すべてその根底に於いて人間の心的過程・人間の意識生活から成立して居る。態度・動機・目的・價値（勿論道德的價値も含めて）・理想・等を離れることが出來ない。これ等は自然界の現象の如くには觀察もされ得ないし又測定もされ得ない。質的研究・質的結論も必要となる。斯くして社會科學に於いては「多くの分野に於いて量的精密さが可能でない。恐らく永久に可能でないであらう。而して假に吾々がそれを得るとしても、それは、より不精密な知識形態に比較し、吾々にとつて遙かに大なる有用性のものとは恐らくならぬであらう。」（一六頁）社會事象に自然科學の方法を適用せんとする人々は、量的精密さを有しなければ科學でないとし、從つて自然科學の方法の適用を主張するのであるが、觀察し得なくともその實在を知り得る場合がある。自然界にしろ人間界にしろ實在に就いて信頼し得る知識を與へるものが科學なのだから、觀察し得ない對象を取扱つても必ずしも科學でないと云へない。觀察し得ぬ實在でも吾々は科學的推理に基いて知ることが出來る。例へば自然科學の領域に於いてすら生物進化論の如き、吾々の經驗上これと衝突する事實は一つもなく、經驗上の一切の事實がこの方向を指示して居るからその眞實を疑へない。これが即ち科學的推理である。斯くして「所謂自然科學の多くに於いてすら、量的に精密な方法は極めて從屬的な役割しか勤めないことは注意に値する。」（一六頁）自然科學に於いてすら、觀察・實驗・測定し得ぬ對象も取扱ひ又これ等の方法に據らずして推理その他の哲學的方法及び想像力の使用に據つて居ることも多いのである。まして社會科學に於いては、自然科學の方法を用ひ得ぬ場合多く、又よしんば用ふるにしても却つて不適當である場合の多いことを認めねばならない。

社會學研究に於いて嚴正なる客觀主義を採る主張はデュルケムに始まつたが、こゝに問題として居る自然科學方法の適用に於いては、それが極端に達して居る。社會學に於ける斯かる極端なる客觀主義換言すれば心的要素を一切排除せんとする態度は、結局、一切の社會過程を純粹に生理學的な過程から說明せねばならぬことになる。斯かる立場を明快に且つ條理正しく述べて居る唯一の人は、ロシアの生理學的社會學者 G. P. Zeliony である。彼は社會學を自然科學とし、社會學の對象を自然現象と認め、意識の問題は彼の社會學の對象から取除かれる。蓋し他の人の精神は、現象とも考へられず事實とも考へられぬからである。彼はその師パヴロフの說いた條件反射の理論及びその他の生理的現象を以つて、從來の社會學研究上に於ける心的過程或は心的因素の地位に替らしめる。一切の人間行動は、要するに外的刺戟に對する生理的反射であると云ふ。斯くして社會學は結局集團生理學となり、道德には一切無關係のものとなる。まことに極端なる客觀主義に基く社會學は斯くの如きものであつて、それは次に述ぶるが如き理由に依つて、社會學方法として不適切である。

上述の如き極端なる客觀主義は、とりも直さず社會學上の行動主義である。それは意識・理想・信仰・欲望・價値・等の如き心的過程に關する概念をすべて拒否し、觀察し測定し得る物質・運動・數量として社會學の一切の對象を取扱ふものであつて、これは社會科學に自然科學的方法を用ひようとする企ての論理的に當然な歸結である。然し斯くの如き行動主義或は極端な客觀主義として上述したところのものは、社會學或は社會科學一般の方法として適切でない。のみならず一般に科學研究の方法としても非難さるべき諸點を有する。先づ第一に、行動主義者は他の方法を用ひず行動主義に據ることを解決濟みの問題として居る。この點科學研究方法一般に必要な實驗的態度を阻害する。第二に、行動主義者は非物理的事象の存在の眞實性を否定する。これは獨斷論である。行動主義を社會科學の方法として適切ならしめるが爲めには、斯かる獨斷論に據らねばならぬ所にこの方法の欠陷がある。第三に、行動

主義者は自分達以外には理解し難い用語を驅使する。例へば「言語」は「喉頭の或は口頭の行動」と云はれ、「交通」は「感覺—神經—運動の構造に依つて到達される感覺—運動の可替性」と云はれるが如きである。第四には、行動主義は文化の非物的局面を科學的に取扱ふ爲めの適當な基礎を所有しない。勿論彼等は文化の非物的局面の存在を否定するが、それは確かに存在する。例へばその根底が信仰にある宗教の如きものを科學的に取扱ふことが出來ない。これ等の諸理由に依つて科學研究方法一般として不適當である斯くの如き行動主義は、更に次の如き諸理由に依つて人間社會の研究に適切でない。その主要な理由は、第一に、斯かる行動主義が社會過程の眞の性質を示さぬ事である。蓋し社會過程は結局に於いて、言葉やその他の交通形態に依つて相互に意識的經驗を交換する結果として行はれる調節の過程である。而して意識的經驗の交換は、行動主義が取扱はぬ意味・感情・價値・觀念・等が交換されることである。第二に、斯かる純粹な行動主義は成人の行動の性質を明かにすることが出來ない。何となれば、文化は精神的主觀的過程から生ずる一方に於いて、成人の行動は集團の文化の結果である。然るに行動主義は文化の斯かる非物的方面を取扱はない。第三には、社會制度は畢竟するところ價値及び價値決定の過程にその基礎を置いて居るが故に、價値を取扱はぬ行動主義に依つては、制度の眞の性質を示すことが出來ない。斯くして「社會科學殊に社會學に於いて行動主義を不適切なりとするずべての理由は、恐らく次の一文に纏めることが出來やう。即ち、社會科學は自然の科學と云ふより遙かに多く文化の科學であるといふことである。」（六四頁）

こゝで著者は行動主義の「倫理的含蓄」に就いて一言する。即ち行動主義者は、非行動主義者を以つて社會的傳統に感傷的な執著を持つものでありこの意味で傳統主義者であると見る。而して非行動主義者が重要視する生活の非物的方面・精神的價値の如きは要するに幻想であり、さもなければ現存秩序を支持しようとする念に出づるものであると云ふ。彼等は、行動主義を以つて變化と進歩とに味方するものとし、彼等の運動がその結果を以つて判斷されることを希望する。行動主義の重要な結果はロシアとアメリカとに現れて居るが、殊にロシアに於ける行動主義は、「辨證法的唯物論」といふロシアの國家公認の哲學として認められて居る哲學の一部分をなして居る。非行動主義から見れば、「若しロシアが行動主義の成果を代表するとすれば、然らば行動主義の道德的影響に就いてのすべての最惡の懸念が實現されて居る」（六六頁）のである。且つ又行動主義は、ロシアに於いてもアメリカに於いても、社會科學の他の方法に關して頑迷な獨斷論に陷りつゝある。これ等が即ち著者の云ふ「行動主義の倫理的含蓄」である。

以上の如く自然科學の方法のみを社會科學に用ふることが不適切であるとすれば、然らば社會科學は如何なる方法を用ふべきであるか。著者は先づ推理・綜合・批判・等の哲學的方法が、社會科學研究の方法としても極めて重要なことを指摘する。度々述べたやうに、社會科學の對象は觀察し得ぬ場合が多いのだから、自然科學の場合よりも一層これ等の方法に依賴する所が大である。然し自然科學に於いても哲學的方法はやはり必要で、それは前に擧げた生物進化論の場合の例で明かであり、從つてこれは特に社會科學のみの主要な方法ではない。社會科學の對象は自然科學とも哲學とも相違するのだから特にそれ自體のみに主要な方法を持たなければならない。然らば社會科學の主要な方法とは如何なるものか。著者に從へばそれは科學的想像・心理學的分析・及び歷史的解釋である。想像は勿論自然科學でも重要である。例へば原子及び分子の學說の如き、今日でこそ豐富な實驗的證明に依つてその實在が推論されて居るとは云へ、五十年以前までは殆ど斯かる實驗的證明を有せず純粹な想像的の概念であつた。しかもそれが科學の進歩に絕大なる貢獻をしたことは周知の如くである。然し社會科學に於いてはその對象の性質上想像は特に重大なる役割を演じ、「事實上、觀察に代るものである」（七二頁）といふのが著者の主張である。而してそれは科

學的想像でなければならぬ。科學的想像とは「一切の觀察し得る事實或は過程の上に築かれ、且つ又それらの事實或は過程を尊重するところの想像を意味する。」（七二—三頁）「換言すれば、吾々が社會科學に於いて利用する想像は批判的でなければならず、又經驗上の諸事實に依つて絶えず照合されねばならぬ。」（七四頁）研究しようとする集團に參加して觀察を行ふ「參與觀察法」にしても、年齢・體性・その他何等かの點で自身と相違する者の行動を理解する爲めに用ひられる「同情的內省法」にしても、この科學的想像を行はうとするものに他ならない。次に他の二つの主要な社會科學方法が心理學的分析及び歷史的解釋であることは、社會科學の對象の本質が、相關々係にある心理的諸過程を含む集合的人間行動に他ならないことを知れば、容易に理解される。一切の社會過程は人間の精神と人間の歷史上の經驗とにその根源を有するのである。故にこれ等二つの研究方法は社會科學に缺くべからざるものであつて、自然科學に於ける實驗・測定の方法に大體代るものである。而してこれ等こそ「自然科學にその類似物を見出し得ぬ」（七七頁）社會科學獨自の方法なのである。心理學は人間行動の一切の問題從つて人間社會の一切の問題に對して演繹的研究の手段を與へる。勿論心理學にも內省的・精神分析的・行動主義的・等種々あり得るが、社會科學者は自己の研究に適したものを選擇すればよいのである。然し乍ら心理學は人間社會の可能性を示すだけで、その可能性が現實に如何に開展するかを示すものが歷史的研究でなければならぬ。實際、文化は歷史の所產であり、社會制度及び行動はその多くが文化の所產なのであるから、その歸納的な研究と心理學からの演繹的研究とは相互に補足しあはねばならない。統計・社會踏査・事例研究・等は、要するにこれ等社會科學方法の內部に發達した特殊的な研究方法である。吾々は歷史と科學的想像との力に依つて、統計・社會踏査・事例研究の結果に解釋を加へ、心理學的分析・歷史的解釋・科學的想像から得る吾々の知識をより正しくより豐富にすることが出來る。

斯くして自然科學及び社會科學は夫々その對象に適應する方法を所有せねばならぬが、いづれにしても社會科學の研究に於いては、眞理の發見に役立つ一切の方法を綜合することに依つてのみ、社會科學の目的にとつて適切な方法に到達することが出來る。即ち以上に述べた社會科學的方法・自然科學的方法・哲學的方法をすべて綜合せねばならないのである。然し乍ら、社會科學にしろ自然科學にしろ、夫々の主要な研究方法を使用し盡くすに從ひ、益々推理・綜合・批判の哲學的方法に依賴するやうに思はれる。自然科學も社會科學も、一切の科學は、「テストされた知識に基かぬ哲學として始まつたが、テストされた知識に基く哲學として終るであらう。」物的の事實や數量やを取扱ふ段階に於ける科學は、單に過渡的のものに過ぎぬと思はれる。（八三頁）

以上に述べた所が第五章までの骨子である。次に著者は第六及び第七の二章に於いて、社會學に於ける觀察・踏査法・及び社會科學に於ける統計法の使用に就いて論じる。著者は、前述して來た自然科學と社會科學との對象の相違に基いて、これ等の方法を余りに重く用ふることは誤りであると云ふ。斯くしてこの觀點よりこれ等の方法の限界を論ずると共に、これ等が社會學に對して有する貢獻の可能性を考究する。殊に著者の强調するのは、踏査及び事例研究の大なる可能性のやうである。これ等は歷史的研究の一部をなすものであるが、同時に又これ等自體の一部が歷史的研究から成る場合に、人間社會の歸納的研究に貢獻するその有用性を一層增大せしめることを指摘する。而して踏査に就いては、その範圍をより擴大すること・動態に關する調査をも重要視すること・文化の非物的要素例へば傳統とか標準とか價値とか意見とかの如きを調査に必ず含めること・等を注意し、且つこれ等の實行が不可能でない所以を說明する。統計的方法に就いては、統計法が取扱ふ物理學的及び生物學的諸條件と社會的事實との普遍的相關々係に疑問を持ち、文化的方面の社會事實に關する場合には斯かる相關々係は相對的であるとする。然し

それだからと云つて、著者は社會的行動の指導に對して統計的測定の持つ實際的價値を疑ふものではない。却つて、斯かる測定がその行はれる場所と時とに對して相對的であるが故にこそ、それは大なる實際的價値を有すると考へる。而して最後に、統計は哲學的及び歴史的考察に基いて解釋される必要のあること・踏査と事例研究と統計とは相互に補足し合ふべき性質のものであることが指摘される。斯くしてこの著者の所說から、著者の場合とその論敵の場合とで社會調査の重要性も相違するし、社會調査の內容も一方は文化の非物的方面を含めることを主張し他方はこれを否定するといふ相違が生ずることを吾々は知るのである。而してこの著者の社會調査に對する態度はまた前掲戸田教授の態度と似て居ると思ふ。

第八章より卷末第十三章に至るまでの六章に於いては、社會科學殊に史學・經濟學・文化人類學・心理學等と社會學との相互依存關係を說き、倫理學・法律・政治・社會事業・教育等の基礎としての社會學を論じ、社會過程の教育的性質・教育の社會進化上の役割・に關して社會學的考究を行つて居る。

以上に於いて極めて不完全ながら本書の大體の輪廓を描いた。冒頭に述べた通り、本書の主要部分は所謂「自然科學としての社會學」に對する論難である。曰く「再び社會學は死せる科學とならんとし吾が知識階級の優雅なる娯樂に墮落せんとする危險に瀕して居る。これは主として、所謂自然科學の精神と方法との社會科學の分野への侵入に基く」（一一一頁）と。然し乍ら果して眞に然るや否や、本書の說く所は讀者をしてその點につき確信を與へないやうに思はれる。その理由の一つは、著者がその論敵の主張を個別的に取扱はず、一般的にのみ論じて居ることである。例へば著者はこの傾向の主要なる代辯者の一人として G. A. Lundberg の勞作を四六頁及び六九頁の脚註に示し、一一一頁にはそれからの引用も行つて居るけれども、引用されて居る部分も比較的に一般的な主張の部分で、その他にこの論敵の主張の細い諸點に言及して居る個所は一つもない。あながち細い論點を一々反駁する必要があるとは限らないけれども、然しこの場合は著者が自然科學の對象と社會科學のそれと性質相違するとして、その理由を擧げて居り乍ら、その論敵が著者と反對の意見に對して種々理由を擧げて居るのと無關係に議論を進めて居るのである。然し乍らいづれにしてもこの書は、現存する米國社會學者中の長老の一人の勞作である事實からばかりでも十分讀まるべき價値があるし、既に六拾余歲に及び乍ら比較的若き學徒がその大部分を占めて居る一群の社會學者と斯くの如き論爭に從事する氣力は尊敬に値すると思ふ。尙又、本書には著者が現在敎鞭をとるノォス・カロライナ州デューク大學に於ける同僚 Howard E. Jensen が解說を書き著者の所說を支持して居る。（昭和九年八月十日記）